

むかしの道具いろいろ

あたためる 暖める

さむい冬のじきからだや部屋をあたためる道具です。日本では昔から木とわらでつくった家がおおく、もえやすいので、火がぼうぼうとでるような暖炉(部屋のかたすみにあり、レンガでつくったかまど)はありませんでした。そのかわりひとりひとりでつかう、火鉢というものができました。火鉢は金属や陶器(やきもの)でできています。火鉢のなかには灰がはいっていて、そとで炭をいこらせて、それを火鉢にいれてつかいます。火鉢に手をむけるとからだじゅうがあたたかくなります。火鉢の上でお湯をわかしたり、おもちをやくこともできます。炭を灰のなかに入れると火がきえます。今では灯油やガスをもやしてあたためるストーブや、電気ストーブ、エアコンがつかわれるようになり、めったにみかけなくなりました。



でんきだんろ [電気暖炉]
 日新電熱器製作所製 70年前
 スイッチをいれると電熱線がねっせられ、あたたかくなります。上にかしつきがついています。



くろうるしひばち (左) とだいつきひばち (右)
 [黒漆火鉢と台付火鉢] 100 ~ 50年前
 台つき火鉢はイスにこしかけたときにつかいます。

てらす 照らす



ぎふちようちん
 [岐阜提灯] 100年前
 ひなまつりのときにつかっていたものです。ぎふ提灯は二重ばりで、ローソクをとすと、内がわの模様が外がわの模様とかさなうかびがあります。

昔はくらいところをてらすのに、お皿になたね油をいれてあかりをとす灯明やローソクをつかっていました。ローソクは風にあたるときえやすので、行灯や提灯のなかに入れてつかわれました。ローソクはこうきゅう品だったので、お寺や神社、お金持ちの人しかつかうことができなかつたようです。明治時代(140年前)になると、くじらの油やガスであかりをとすランプがとうじょうしました。このようなランプはまちをて



でんきスタンド (左) とローソクランタン (右)
 100年前と80年前

はこぶ 運ぶ

駕籠や人力車は、ひっぱてくれる人にお金をはらって目的地までこんでもらうための道具です。駕籠は大昔からありましたが、よくつかわれるようになったのは江戸時代(およそ350年前)からです。まん中のはここに人がのり、前と後につきでているながい棒を2人でかついで、はこんでいきます。はじめはお殿様やお金持ちの人がつかうものでしたが、やがてふつうの人びともよくつかうようになりました。明治時代(140年前)になると人力車が登場しました。人力車のほうがスピードがはやかったので、駕籠はしだいになくなっていきました。人力車は前につきでたつてをひっぱって、人をはこんでいきます。人力車はたくさんの人でにぎわう駅前やはんかがいをはしっていましたが、昭和のはじめごろ(およそ70年前)にはタクシーがこれにとってかわるようになりました。今ではほとんどの家に自動車がありますので、昔の人にくらべてタクシーをつかうことも少なくなりました。

かご [駕籠] 150年前 全長270cm



じんりきしゃ [人力車] 130年前
 全長210cm 車輪の直径105cm

いずれも鴻池家の主人や家族、番頭とよばれた社長をおくりむかえするのにつかわれました。駕籠はたたみおもてをめぐりあげて、出入りすることができます。中には本をよむためのつくえがあります。人力車は一人乗り用です。車輪のじくについているだ円バネが、振動をやわらげてくれます。

らすあかりでした。家ではまだローソクがつかわれていたのです。電気がかき家にとどくようになってからは、ローソクはぶつだんの前やとくべつなお祭のときにしかつかわれなくなりました。今ではくらいところをてらすのに、電球や蛍光灯、発光ダイオードなどがつかわれています。

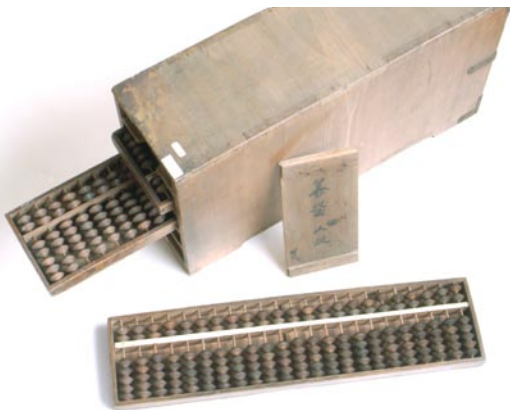
てしよく [手燭] 100年前
 まいにち夕方になると、これをつかって家じゅうの行灯やローソクに火をつけてまわっていました。

きく 聴く・聞く

はなれたた場所にいる人の声や音をきく道具（電話機・ラジオ）、いちど別のものに記録した声や音をきくための道具（蓄音機）などがあります。電話機や蓄音機が発明されたのはおよそ130年前のことで、アレクサンダー・ベルやトーマス・エジソンが発明しました。2人とも目の不自由な人たちのための音がでる道具をつくりました。いっぽう、グリエルモ・マルコーニがイギリスとカナダのあいだで、無線による音のやりとりを成功させたのはおよそ100年前のことで、90年前にははじめてアメリカでラジオ放送がはじまりました。日本のラジオ放送は80年前にははじまりました。今はどうでしょうか？ケータイはもちろん電話をするためにつかいます。でも、ケータイで音楽をきくことができます。ラジオをきくこともできます。テレビ付のケータイも登場しました。便利になったものです。



でんわき [電話機]
日本電気社製 90年前
昔の電話は交換手をと
おして、相手の電話をよ
びだしてもらうしくみ
になっていましたので、
ダイヤルやプッシュボ
タンはありません。



そろばん [算盤] 120年前
7つ珠のそろばんです。お金の計算をすばやくするために、おおくの商売人がつかっていました。



ちくおんき [蓄音機] コロムビア製 90年前
針がレコードの溝からちいさなでこぼこをよみとって振動板につたえ、さらに振動を音にかえてホーンからおおきな音をだします。



ラジオ 早川金属工業研究所(現・シャープ)製
80年前
AM放送せんようラジオ。このころのラジオには、電球ぐらいのおおきさの真空管がつかわれていました。

かぞえる 数える

日本ではじめて硬貨(金ぞくでできたお金)がつけられたのは1300年前のことで、品物と交換するためにつくられましたが、つかう人はあまりいなかったようです。硬貨をつかう人がふえたのは500年前ごろで、金や銀で硬貨をつくったからです。それまではものものを交換して、ほしい品物を手にいれてましたが、お金で品物をかうことができるようになったので、お金で品物をかえるようになります。すばやくお金をかぞえたり、すばやくお金の計算する必要ができました。

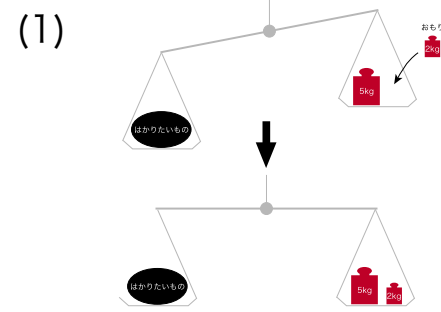
はかる 計る・量る

ものの重さをはかるしくみには、(1)はかりたいものとおもりをつりあわせる天秤ばかりと、(2)ものをぶらさげたときのバネがのびるながさをよみとるバネばかりがあります。わたしたちのまわりにも重さをはかる道具はたくさんあり、身体の重さをはかる体重計、魚屋さんや肉屋さんがつかう上皿ばかりなど、ほとんどのものはバネばかりのしくみをつかっています。このふるい体重計や銭秤、棹秤は天秤ばかりのしくみをつかっています。今ではみかけませんね。んっ？ほうとうは天秤ばかりは復活しているのです。デジタル表示(数字がでてくるやつ)の体重計やバランスWiiボードがそうです。天秤ばかりにはつりあわせるためのおもりが必要ですが、みあたりません。心配御無用！電気磁石がおもりをつくりだしてくれるからだいじょうぶです。このようなはかりのことを電子天秤といいます。

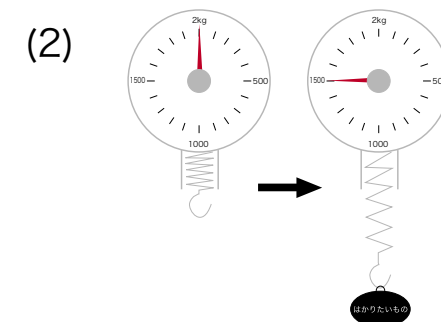


たいじゅうけい [体重計]
おおさかまつせいぞうせい
大阪松井製造製 90年前
台手動はかりともいいます。
天秤ばかりのしくみをつかっています。体重をはかる人はいすにこしかけて、はかる人は左のおもりとめもりを調節し、つりあったところがその人の体重をあらわします。おもりやめもりには、疋(キログラム)と貫・匁という2種類の重さのたんいがつかわれています。

鴻池家寄贈民具展
「むかしの道具いろいろ」展示パンフレット



(1) 左右がつりあったときのおもりの重さが、はかりたいものの重さにあわす。



(2) はかりたいものをぶらさげたとき、はりがさしためもりがその重さにあわす。



ぜにばかりとふんどう [銭秤と分銅] 200年前

天秤ばかりのしくみをつかっています。銀の重さをはかるのにつかわれました。分銅にはさまざまな重さのものがああります。



さおばかり [棹秤] 100年前
天秤ばかりのしくみをつかっています。もちはこびができます。

編集・発行 史跡・重要文化財 鴻池新田会所
財団法人東大阪市施設利用サービス協会(指定管理者)
〒578-0974 東大阪市鴻池元町2-30
TEL 06-6745-6409
http://www.bunkazaishisetsu.or.jp

発行日 2008年1月19日